二疊敷三疊四疊半にもあり、休居士○千利休二疊敷の時の作也、

〔和泉草十〕一座敷潜り高さ二尺二寸五分、はゞ一尺九寸五分、方立の厚九分、はゞ一寸九分半、たてこみ九分四方、敷居鴨居ははさみ也、同はゞ、一寸七分、一寸七分半、同厚七分、七分半、

〔茶道筌蹄一〕小座鋪之部

クゞリ口　至て大なるは妙喜庵にあり、牧方の漁人の家の小き戸口より出入するを見て、居士○千利休始て好む、

〔茶道早合點上〕茶室

亭主出入する口を勝手口と云、又茶立口とも云、上の方をまるくぬりたる口を瓦燈口と云、又通口ともいふ、○中略大目切向板にて中柱のあるに、横手の壁にをとしがきある口をかぢや口と云、

〔茶道筌蹄一〕小座鋪之部

勝手口　ホタテ口と火燈口は勝手口に限る、〈火燈口スリマハシは、勝手口と通ひ口と兩樣なり、席によりて釣襖もあり、古風には引違ひ襖にて、勝手口と通ひ口と兼用するもあり、堺鹽穴寺利休好の二疊臺目あり、引違ヒなり、デグチつけられぬ席ゆへ也、

通口　ヌリマハシに限る、茶の湯の節、菓子煙草盆通ひ口より出す、通口の濫觴は、臺目切にては、點茶の節、貴人の前へ行て急なる用向など、勝手口より申上難きゆへ、利休勝手口の外に通ひ口を明る也、夫故に是を禿口といふ也、禿口の出入する爲といふ意なり、

〔南方錄二〕火竇口附櫛形甕頭

草庵には緣なし、塗廻しよし、火竇は火燈の器なり、其形に似たる故火とう口といへり、櫛形甕形、夫々におふする名也、

〔茶傳集十二〕一境の町人に侘數寄有、俄に利休に茶の湯仕事有て、勝手口の壁を切拔、其口を紙に

通口
勝手口